

## 令和2年度 第2回 初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会 議事録

日時	令和3年2月17日（水）16：00～18：00	
場所	リモート会議（ZOOM）	
委員	内川 健 成蹊小学校 教諭 江藤 誠晃 株式会社 BUZZPORT 代表取締役 大日方 樹 岩倉高等学校 教諭 勝瀬 典雄 関西学院大学 専門職大学院 経営戦略研究課 兼任講師 河合 豊明 品川女子学院 教諭 【欠席】 宍戸 学 日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授 鈴鹿 剛 徳島県立 徳島商業高等学校 教諭 鈴木 俊博 特定非営利活動法人 TOSS 教育事業本部 本部長 高嶋 竜平 法政大学 国際高等学校 教諭 寺本 潔 玉川大学 教育学部 教育学科 教授 中野 憲 株式会社 JTB 教育事業ソリューションセンター センター長 中村 晃 公益社団法人 日本観光振興協会 常務理事 森下 晶美 東洋大学 国際観光学部 国際観光学科 教授 【座長】 村上 和夫 立教大学 名誉教授 【副座長】	
	（氏名五十音順・敬称略）	

### 1 開会

#### ○事務局・観光庁

只今より、「初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会」を開催いたします。

皆様、本日はご多忙のところご出席いただきましてありがとうございます。私は本日の事務局を務めさせていただきます刀根と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は新型コロナウイルス感染症の拡大状況を鑑み、リモートで開催させていただきます。

また、本日は、品川女子学院の河合豊明教諭が欠席となります。出席者の皆様については、出席者名簿をご確認ください。

それでは、本日の議事に先立ちまして、観光庁参事官の町田より開会のご挨拶を申し上げます。

### 2 挨拶

#### ○観光庁 町田参事官

本日はお忙しいところ、ご出席いただきまして誠に感謝しております。ありがとうございます。

また、今年度は分科会を複数回開催し、先生方には活発にご議論いただきましたことにも感謝申し上げます。

本日の協議会では、各分科会での活動を振り返り本年のまとめをしたいと思っております。また、来年度の活動へのご議論をいただければと思っております。

最初に申し上げておきたいことがあります。通常、年度末に観光庁の施策として具体的な方向性を出すのが通例ではございますが、本年のこの協議会につきましては観光庁の考えを出すとい

うよりも、先生方のご意見を最大限おうかがいしたことが今年の活動の中心であったと思います。先生方から観光教育の現場をふまえた大変貴重なご意見を多数いただいたと思っております。直前に読ませていただきました議事録自体が、大変貴重な資料として残っていくものだと思っております。一方で、観光庁の意見が見えてこないというご指摘もあるかと思っております。今年うかがった貴重なご意見をもう少し時間をかけて消化した上で、今後の具体的な方向性につなげていきたいと思っております。

本日は、まだまとめに至っていない点についてお詫びを申し上げつつ、本協議会を振り返るといって進めてまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

### 3 分科会の開催過程を事務局より報告

○事務局・MURC 平川

資料1を説明。

### 4 議題

(1) 各分科会の報告

○玉川大学・寺本委員

資料1を説明。

○東洋大学・森下座長

寺本先生、ありがとうございました。非常に興味深いご説明でございました。「公共性が高い」とありまして、今日的なキーワード、例えば「他者理解」「キャリア基本教育」「SDGs」「サステナビリティ」などは重要性が高いと考えておりました。

では、続きまして高校普通科部会から村上先生、お願いできますでしょうか。

○立教大学・村上副座長

資料1を説明。

○東洋大学・森下座長

村上先生、ありがとうございました。さすがに高校になってくると難易度の高い議論もあったと思われました。非常に重要なところとして、観光教育が社会や高等教育につなげていく位置づけにあり、学問の学びの幅がどんどん広がっていくきっかけになるということです。従来の教科目だけではなく、生き方や教養の部分に観光が役割を果たせるのではないかというのは、うかがいながら頷くところでありました。ありがとうございます。

では、続きまして高校専門部会の宍戸先生、お願いいたします。

○日本大学・宍戸委員

資料1を説明。

○東洋大学・森下座長

宍戸先生、ありがとうございました。専門学科は先んじて取組んでいただいているところでありますので、課題を中心にまとめていただけたと思いました。特に商業科だけにとどまってしまうのもったいないので、ほかの専門科にどのように展開させていくのか。せっかくの観光の持つ力をどうするか、まさしくその通りだと思いながら聞いておりました。

では、ここまでの議論を踏まえまして事務局から本年度のまとめをお願いしたいと思います。各分科会のまとめに関してのご質問やご意見は、後程、意見交換のところでしょうかがいます。

## (2) これまでの検討を踏まえた、本年のまとめ

### ○事務局・MURC 平川

資料1を説明。

## (3) これまでの検討を踏まえた、本年のまとめ

### ○玉川大学・寺本委員

事務局には、多岐にわたる内容を大変うまくまとめていただけていると感じました。ここ3年ほど関わらせていただいている、過去にまとめられた資料などを踏まえ、次第に整理されてきていると感じました。

この場を借りて、宍戸先生にお尋ねしたいことがあります。高等学校専門の商業科の中で、商業高校だけではなく工業、農業、福祉にも観光教育が絡められるとおっしゃっておられました。例えば、工業なら産業観光の視点、農業はアグリツーリズムの視点、福祉は医療ツーリズムの視点があります。工業、農業、福祉の産業がより人々の役に立つ産業、仕事として成長するというイメージをしていけば良いのでしょうか。

### ○日本大学・宍戸委員

その通りだと思います。今回の分科会メンバーの中に、沖縄の水産高校の先生がいらっしゃいました。水産の場合は、マリンスポーツや操船などのマリンレジャーの中で関わりがあります。もちろん、水産科がやっているのはもっと純粋な魚に関する技術ありますが、レジャー関連での取組みが長く続いている学校もあります。今回のメンバーではありませんが、別の会で福祉科はバリアフリーツーリズムというところで、障がいのある方、今後増える高齢者など様々な方が観光することが福祉における課題だと思います。工業については具体的なイメージはされていないのですが、先生がおっしゃったように工業分野もいろいろな切り口で観光に絡めると思います。

観光ビジネスは、従来の商業教育において先行しているのですが、例えばニセコ高校は、もともと農業高校でグリーンツーリズムとの兼ね合いで意識されていたと思います。

ほかの先生の分科会との関わりで考えると、我々は商業科の分科会とは考えてはいなかった。結果的に商業科の先生が多かったのですが、ほかの専門高校、専門学科の可能性も十分にあると、我々はそこを意識していくべきだという意見が出てきました。具体的にどうやっていくのかは決まっていますが、関係する多様な専門学科の先生方との意見交換は、私自身すごく勉強になりました。

### ○玉川大学・寺本委員

ありがとうございました。宍戸先生のご示唆は、小学校段階における総合的学習の中で観光や観光産業を扱う時の良いヒントになると思われました。ありがとうございました。

○東洋大学・森下座長

寺本先生、宍戸先生、ありがとうございました。それでは成蹊小学校の内川先生、いかがでしょうか。

○成蹊小学校・内川委員

事務局のまとめた資料が良くまとまっていて、私が言いたかったことも網羅されていると感じました。ここでは、私が分科会で感じたことを簡単にお話しさせていただきます。

分科会を通して、小中高、いずれの段階でも魅力的な観光教育に取り組めるということがよくわかりました。そこで課題があると思ったのは、観光をテーマにした学習は何でもできるという良さもある反面、その多様性が切実感を持たせた学習に昇華する際の阻害要因になるのではないかということです。小中高において、観光という名前を付けたら学習になる危険性が出てくると、観光教育とは何か、何でも良いのか、何をしたら良いのかわからないということにつながりかねないと思っています。

今回、皆様から教えていただいたことは、様々な事例として取扱えます。今後、全国的に普及させることを考えていくとしたら、観光教育で学ばせたいという切実性を伴った観光のテーマを選ぶための指針や、必ず押さえておきたい学習内容を吟味する必要があるのではないかと感じています。要するに学習内容の選択と集中、あるいはミニマムエッセンシャルズの検討ということになると思います。仮に具体的に言えば、訪日外国人の観光客数の増加を統計から読み取って地域の問題は何かを話し合う、地図上でのプランニングを学習する、環境問題と絡めて観光公害について学習する。そのような「これはやりましょう」と賛同を得られるテーマを強く打ち出していかないと、学生に伝わる前に先生方の中で「面白そうだね」で終わってしまう。来年度以降、そういった議論ができれば、より具体的に全国的に広げられるのではないかと思います。

それからもう一つ、来年度以降、観光に取り組もうと思った時に、ここでも何回も上がっていますが体制づくりがあると良いと思っています。観光協会、観光業界で働く人たちなどの参加が必須だと思いますので、多くの先生方に実践してもらうためにも体制構築は必要だと思います。

○東洋大学・森下座長

内川先生、ありがとうございます。教育として「楽しくて良いよね」で終わってしまわないようにするには、なかなか難しい部分があるのはわかります。

続きまして高校普通科部会の村上先生からも、ご意見を賜ればと思います。

○立教大学・村上副座長

私からは2点あります。

1 点目は、高校普通科の部会をまとめた際には出てきませんでしたが、教養や品位を突き詰めていくと、無駄をしないという日本の文化ではとても重要な点が浮かび上がってきます。品位が上がるほど、贅沢ではなく自然に近くなっていく。例えば、京都で12万円の旅館に泊まるのも安

いという感覚になるわけです。そのような点で考えると自然環境、排出物抑制を教えることも重要です。しかしながら、我々の生活の中でどのように品位を高めていくか、どのように自然と共生して生きていくことができるのか。そのポイントを高等学校の中できちんと教えることが必要だと考えています。あくまでこれは私個人の意見です。

それから、2点目は学校の外で学んだことについて、学校を通じて高等教育や企業への就職につなげることができないかという問題です。この中に語学の先生がいたら、ひしひしと感じておられると思います。留学しても生徒が一向に発言しないことが、英語留学の大きな問題点として挙げられます。出席していれば留学したことになるというのが今の日本の現実で、それでは学生の成長につながりません。自分が社会の一員として働く、そこで自分がきちんと理解したことをまとめ、大学、社会に巣立つ。そこで活かすことができないか、と私は考えております。

#### ○東洋大学・森下座長

ありがとうございます。高校になってくると、社会とのつながり、その先への議論となってくると思います。貴重なご意見、ありがとうございます。法政大学国際高等学校の高嶋先生、続いてご意見を賜れますでしょうか。

#### ○法政大学国際高等学校・高嶋委員

今回、このような機会をいただきまして、貴重な経験になりました。改めて観光教育の幅広さ、可能性を感じた日々でございました。

小中高、普通科、専門、大学の先生からもお話を伺い、生徒の発達段階の中で生徒に考えさせたい社会の課題を具体的な提言を持って提起なさっていて、大変勉強になりました。

本校は国際高校となって3年目となり完成年度を迎えました。今、新カリキュラムの討議が始まっています。国際高校として将来をどう考えるのか。さらに新カリキュラムは新しい教育の潮流を踏まえ、新しい学びのスタイルを作り上げていこうとしています。その中で私も観光教育の活用について、積極的に発言したいと思っています。

観光教育という言葉は非常に強いメッセージ性があると思います。観光という言葉を語ると、極めて限定的な対象の教育になるというイメージがあります。その一方で、観光を語りながら、その本質は教育について議論することになるとしています。ここに観光という文字を付けてしまったとき、普通科である本校や、あるいは学校全般において観光教育を導入する中で、限定的なイメージとして語られていくことが起こってくるのではないかと考えています。観光教育に関わりやすいのは社会科と思われるのですが、実は英語、国語、家庭科、体育と各学校には専門性を持った方がいらっしゃいます。それぞれの専門性をまとめていくような形で観光教育があるのが理想であると考えますが、観光という言葉のイメージが、今のところ限定的であるなかで、制約にもつながりかねません。そこを変えていくのが、今後の観光教育が広がるためのカギになるのではないかと考えております。

来年度、この協議会がどのような役割を果たすのかという点ですが、本校だけではなく、多くの学校が夏前に完成することを目標に、新しい学習指導要領の下にどのようなカリキュラムを作るのかの議論を始めています。ここに積極的に提言していくには時間的に難しくなっていますが、継続して議論していくことは必要なことです。長期的に見れば学びが大きく転換し、主体

的学び、探究的学習が取入れられ、これまでの学習とは価値観が変わることを議論しようとしています。各高校において学びのあり方を再検討し新たなものを構築していく中で、観光教育が新しい潮流の中で魅力的なもの、具体的な解決策を提言していくことができるのか、大局的な視点を持って観光教育を語っていくことが、今後重要になるのではないかと考えております。

私の授業においては、来年度、希望する生徒が何名かおありまして観光学が成立しました。講座の内容をみなさんと討論したことを踏まえ、社会の課題を解決するための観光、そういう観点で内容を精査して、みなさんと意見交換をしていけたらと考えております。

#### ○東洋大学・森下座長

ありがとうございました。おっしゃるとおり、観光はだれでもイメージできる分、限定されてしまい多様性がなかなか理解されていないということもあります。

続いて高校専門学科の方で宍戸先生、またお願いできますでしょうか。

#### ○日本大学・宍戸委員

観光教育は様々な可能性を持っているため、これを推進していきたいということは専門学科の先生方と共通しています。新しい科目として観光教育に取り組んでいる先生方は非常に熱心で観光に魅力を感じていますが、文科省が設定した科目の学びは商業教育だけでなく、普通科その他の分野でも導入できるのですが、それに気付いてもらえるかどうか重要です。

情報発信がすごく重要で、高校の観光教育の研究会はありますが非常に小さなものです。しかし、すでに取り組みが進んでいるこのような場を生かして、観光庁はじめ様々な方々の力を借りて、高校の専門学科で観光教育に取り組む先生を増やせるかが最も重要な課題だと思っています。今でも20数校の先生とつながりがありますが、それだけで良いとは思っておりません。いかに輪を広げていけるか、そのための施策や支援が課題ではないかと私自身は考えております。

#### ○東洋大学・森下座長

ありがとうございました。小中高を含めまして会をしておりますが、いかに広げていくかが重要な点だと思います。宍戸先生、全体の座長も務めていただきましてありがとうございました。

続きまして大日方先生、いかがでしょうか。

#### ○岩倉高等学校・大日方委員

いろいろな先生方のお話を伺い、私自身も非常に勉強させていただきました。事務局の方々には、資料を作っていただきましたが、今まで、高校の部会で高嶋先生や宍戸先生と様々な場で交流はありましたが、このように具体的に資料として示されたものがあまりなかったので、非常にわかりやすく示していただき勉強になりました。この場を借りてお礼申し上げたいと思います。

これまでの議論や小学校、中学校の先生方のディスカッションの中で、私は高校の専門科であります、小学校や中学校でやっていることを変化させて観光教育につなげられることが分かりました。高校でできること、工夫できることはたくさんあると思います。

今後に向けては、先ほど高嶋先生からもありましたように、世間の観光に対するイメージがかなりマイナスになっています。旅行会社の撤退、倒産、観光に付随する業種を含めてマイナスの

イメージがついています。コロナが終息すれば変わってくるとは思いますが、観光で何が学べるのかを我々が発信し続けることが必要であると思いました。

さらに、どのような学びをしていくかに関しては、寺本先生がおっしゃったように「医療ツーリズム」などの観点をどんどん広げていけば、専門学科でも様々な学校に声をかけられるという発見がありました。強引かもしれませんが、観光とそれぞれの学科をどうやってつなげていくかを我々が考え、カリキュラムを組んでいくことも考えられます。さらに、授業の部分で「観光ビジネス」が科目になると思いますが、教える立場の教員をどのように育てていくのかも考えていかなければなりません。意識や興味がある先生は自分で学んでいきます。私立であれば、ある程度学校にいるので先生が変わらないし学びを積み重ねることができそうですが、公立の場合は異動がありますので、先生がいなくなったらゼロに戻ってしまう。学びたいと思って入ってきた生徒たちには意味がなくなってしまい、できることがゼロになってしまいます。それをどう防ぎ、学びの場を増やしていくことが必要になってくると思いました。

#### ○東洋大学・森下座長

大日方先生、ありがとうございます。多岐にわたるご意見をいただきました。確かにコロナ禍以降、観光は微妙な立ち位置にあります。おっしゃるように今、観光は何が出来るのかを確立していくことが非常に重要なことだと思います。ありがとうございます。

続きまして鈴鹿先生、ご意見を賜れますでしょうか。

#### ○徳島商業高等学校・鈴鹿委員

いろいろきれいにまとめていただいて、大変ありがたいと思っています。

今まで伺ってきた意見の中で、修学旅行の活用はありだと思いました。私どもは商業高校で、徳島県としても県外から受け入れた際に探究と絡める形、PTLやSDGsやSTEAMと絡める形で生まれ始めています。各校での取組としては良いな、そういうことが広がる仕組みを作れたら良いな、と一つ思いました。

それから観光ビジネスを実際にやっていく商業高校の立場からすると、2つのモデルを出していく必要があると思います。ひとつは、いつでも、どこでも、だれでもできるような分かりやすい形での観光の学びのパターン。もうひとつは、ほかの学校から見て憧れのような、ここまでできたら良いよね、というモデル的なトップ事例のパターン。この2つを示していきながら、多くの学校で取組める観光ビジネスが展開できる環境づくりが必要だと思います。それを打ち出すことで参考にする普通科の高校、小学校、中学校へもつながっていくと感じています。今回、成長段階におけるつながりを重視していただいていると思いますが、よりわかりやすくなればと思います。

長期的な視野で言うと、2025年に大阪万博があります。今夏のオリンピック・パラリンピックは微妙な情勢ですが、いずれにしてもどこかの段階では世界はまた元に戻り、様々な交流が世界的に戻ってくると思います。それまで単に待っているのではなく、そこに向かっていける教育をどう作っていくのが重要だと思います。人材も突然は作れませんので、計画的な人材育成を考えていかなければなりません。そのようなこともしっかり議論できたら良いと思います。その中で、当然、子どもだけではなく教員もワクワクできるようなカリキュラムが必要です。教員が楽しいと思えば学生も興味をもって取組むと思います。「これ、おもしろそう」、「子どもたちに効果

あるな、やっけていて面白いな」と思えるものが、ぜひこの会から一つでも生まれたら良いなと思っています。そのような中で、狭義の観光ではなく、広義の観光でプロデューサーやコーディネーターのような、どの分野においても活躍できるような人材育成に観光が寄与できると思います。観光で様々な人材を育てることができるということを示すためにも、来年また議論できたら良いと思っています。

#### ○東洋大学・森下座長

鈴鹿先生、ありがとうございました。非常に具体的で分かりやすいご提案でした、ありがとうございます。

続きましては、それぞれの協議会の委員の先生方におうかがいしていこうと思います。まずは分科会にもご出席いただきました JTB の中野様、いかがでしょうか。ご意見を賜れるとありがたいのですが。

#### ○JTB・中野委員

資料説明。

コロナ禍の昨年9月～12月に全国約30校でトライアル実施したプログラムです。4コマ～8コマの学校の授業をお借りして、授業内でプロジェクトとして進めさせていただく教材・教案という形です。内容は弊社が管理する観光予報 DS（データサイエンス）というアプリを利用して RESAS や官公庁のデータなどが取れるデータサイトと、教育タキソミーというメソドロジーを掛け合わせて作った教案プロダクトです。これを使って生徒の皆様に地域の（主に観光に関する）理解と課題の抽出をしていただき、解決のアイデアを絞り込み、ポスターを制作することでアウトプットしていくものです。かつ、プレゼンテーションを実施していく PBL 型プロダクトになっています。実施後のフィードバックとしてアンケート結果が非常にポジティブでした。全般的に「とにかく楽しかった」という評価を多くいただきました。「こんな授業受けたかった」「JTB の人がプロフェッショナルとして専門的な話をしてくれておもしろかった」というコメントを頂きました。実施した学年の高い低いにかかわらず多くの学校で「楽しめる内容だった」という感想をたくさん頂き、私どもの予想を超えた好意的な結果でした。私どもとしては、このような商材を磨き上げて創り出すことで、観光教育のすそ野を広げていくことかなと考えております。

今後については、校種や学科を問わない「総合的な学習の時間」「総合的な探究の時間」での同プログラムの汎用的な活用はもとより、宍戸先生からありましたように商業科に観光ビジネス学科がありますし、2022年度は普通科の再編があります。その中に地域探究学科（仮称）の話もあります。同様に、広域通信制高校の申請がたくさん上がっているということで、有名どころでは角川ドワンゴさんの N/S 高、堀江氏のゼロ高、ワタミ学園の ID 学園などいろいろあります。このような通信制高校、もしくは広義な意味での GIGA スクール構想に対応するような商品をオンラインで提供し、観光教育の拡充に取り組んでいきたいと考えております。

最後に、中長期的なビジョンについてです。今回、同プログラムの教育現場へのローンチは、経産省の EdTech 補助金を活用させて頂きました。今後、観光教育を広めていくための予算をぜひ検討いただきたいと思います。



○東洋大学・森下座長

中野様、ありがとうございます。最終的に教材をどう作るのかがあり、実際に先んじてやっていただいている例は非常に参考になるかと思えます。ありがとうございます。

続きまして、ネクストツーリズムの江藤様、いかがでしょうか。

○BUZZPORT・江藤委員

資料説明。

今年度の「観光甲子園」で注目したのは、中・高連携校の参加が非常に多かったこと、従来の商業高校や普通科に加えて工業高校が初めて決勝に残ったことです。場合によっては、陸上部のような観光とは関係のない運動部が出てくるというケースもありました。そういう意味で様々なアプローチで観光を考えていただき、動画の中で踊るなど、高校生が自分たちの活躍の場をこのコンテストに見出してくれたことが面白かったです。

それから高大連携についてです。兵庫県の「ひょうご大学生観光局」というポストコロナ事業で、観光業界を目指す学生を対象とした10人の特別ゼミを募集したところ347人が集まりました。そのメンバーに観光甲子園を聴講してもらい、レポートを出してもらいました。非常にシビアな意見が出てきて、町田参事官以外に女性の審査員がいないことなどの指摘もありました。大学生からジェンダーに対してシビアな意見が出ております。逆に大学生は自分たちの評価と先生方の評価は違う、つまり大人と大学生の評価の違いがあるので、来年は大学生審査部門を作ってほしい、一部のメンバーが観光甲子園と高校に行き行って授業ができないかというコメントもありました。私のゼミではプロジェクトを作るように指導していますので、これも早速4月までには高大連携のプロジェクトのひとつのアイディアとして紹介できるのではないかと思います。

主催している私が思った以上に効果が出ており、やはり主役は高校生だと思いました。それぞれの創意工夫の中で様々なアイディアが出てきましたので、ご参考にしていただければと思います。ぜひ公式サイト作品もご覧いただきたいと思います。

○東洋大学・森下座長

江藤様、非常に詳しいご説明をありがとうございます。コンピテンシーとやる事との関連性はすごく整理が難しいかと思いますが、非常にわかりやすいものを見せていただき、具体的に我々も将来、何をしないといけないのかイメージ作りができたのかなと思います。おっしゃるように、普及策やプログラム作りに関して示唆に富んだ先行事例であると感じております。ありがとうございます。

続きまして関西学院大学専門職大学院の勝瀬先生、ご意見を賜れますでしょうか。

○関西学院大学専門職大学院・勝瀬委員

私は、分科会に参画はしていませんが、徳島商業、岩倉高校などの一部の高校でお話をうかがいサポートをさせていただきました。

今年度、文科省の高度専門職人材の委託事業を受けまして、関西学院大学で初めて「MICE・地方観光人材育成プログラム」を実施いたしました。来年度も継続されます。観光人材とは何かというところが、明確な一つの方向性を再度明らかにしないといけないのではないかと、ということ

ろが現場の意見からも出てきました。参画いただいたこのプログラムはMBAと連動しています。大手の旅行会社、自治体といった観光人材関係に直接携わる方々が、これからコロナの時代を含めグローバルな一つの展開を考えた時、今の日本の観光人材は、どのような人材を必要としていくのか。グローバル人材、ホスピタリティなどの言葉の中で、もう一度専門職として、大学の役割もそうですが、その大学に進学する前にもう一度、高等学校であるとか基本的な義務教育の中でこういう人材を作っていこうという方向性が必要だと思います。それがあって初めて大学に来て専門性を追求できるのだという議論が至りました。

経産省の事業でもツーリズム人材という大きな視点を持っております。クールジャパンの政策室や経産省自体の海外の展開関係も含めて観光人材というひとつのブームがあります。その中のツーリズム人材など、様々が挙がっています。そのような人材育成の指針が欲しいと思いました。

観光庁から2011年に「観光系マネジメント人材育成のためのカリキュラムモデル」というものが出ています。あまり議論されなかったのですが、もう一度振り返ってみると今回の全国の先生方や様々なステージの中で動かれている方も含めまして、教育の現場の先生方がもう一度、どのような人材を育成していくかを明確にしていくモデルケースが必要だと感じています。やはり教育する先生方の指針になるカリキュラムモデルや、ガイドラインの作成が必要だと思います。

基本的には経済産業省も同じ観点を持っていて、海外の大学や教育を見た時に、日本の教育は視点がだいぶ異なるということです。ホスピタリティやサービス人材の視点を加えたところで、日本のこれからの将来を担っていく、リーダーシップを取っていく、地域のリーダーとしての観光人材の位置づけからすれば、基本的には進む方向がはっきりしてくるだろうし、その人たちの価値づけも明確になるのではないかと感じております。

来年度もこの事業は継続していただくとのことです。様々なところで実践されている内容を体系的に整理し、教育現場の中で人材育成が進めばと思います。今までの経験や省庁関係を横断できる人材のモデルは、当然として出せるのではないかと感じております。

現場では人材不足が起きています。産業界からもコロナで疲弊している地場産業からも将来的にこのような人材が必要だという意見が出てきています。それらを含めて来年度、ぜひ方向性を具体的により横断型に示せるようにしていただきたい。今回は文科省が入っていないので、正直どう考えているのかすごく気になっているところがございます。やはり高校の先生方は、基本的に文科省の指導要領に従わなくてはならないですから、文科省「MICE・地方観光人材育成プログラム」の委託を出しているように、かなり関心を持っていると思います。ぜひ観光庁からのアプローチもお願いします。

#### ○東洋大学・森下座長

勝瀬先生、ありがとうございます。いろいろな意味で横断的な対応が必要だと、改めて認識させられたようなところがございます。ありがとうございます。

続きましてTOSSの鈴木先生、お願いできますでしょうか。

#### ○TOSS・鈴木委員

4点お話をさせていただきます。

昨年11月末にテレビ番組で、「これからの観光振興には、デジタル化は欠かせない」という話

を5分ほどさせていただいたところ、300件を超える問い合わせをいただきました。観光のデジタル化はもう欠かせない、つまり、観光デジタル化の人材育成が欠かせないと思います。

2点目です。来年度もZoomによる「子ども観光大使全国大会」を検討中です。今年度は750端末がつながりました。多分、750家族にご覧いただいたと思います。来年度も同様に続けたいと思っております。

3点目は、1月にLINEみらい財団のご協力で「LINE study」というサイトの中に、教師のサイトを作りました。わずか1か月足らずで6,000名を超える先生方が登録してくださいました。来年度は、この中に観光教育のサイトを入れ込みたいと思っております。

4点目は、分科会の寺本先生からもありましたようにSDGsを修学旅行で教えていきたいということで、昨年度JTB総合研究所からお話をいただきました。修学旅行の着地型の地域のガイド養成をSDGsを含めて行いたいということで、宮崎県にTOS Sの先生方が出向き検討しました。非常に良いことだと思います。今後は、SDGsを含めた着地型のガイド養成をしていくことが必要だと思います。

私は分科会に出られませんでした。静岡で観光教育を熱心にされている手塚先生に分科会でお話していただきました。観光教育を小学校の段階から広げようと一生懸命に活動されています。ぜひご支援をお願いします。

#### ○東洋大学・森下座長

ありがとうございました。端的に四つにまとめていただきました。非常に示唆に富んだ内容だったと思います。特にデジタル化は産業界も苦労されているところがありますので、おっしゃるとおりだと思います。ありがとうございました。

そうしましたら最後になりますが、お待たせいたしました日本観光振興協会の中村様、ご意見を賜れますでしょうか。

#### ○日本観光振興協会・中村委員

3つの分科会から多くのご示唆を頂きました。ありがとうございました。非常に参考になりました。2019年までは、地方創生の切り札として観光産業は基幹産業として位置付けられてきました。昨年2020年は、コロナにより甚大なダメージ、地方経済は相当疲弊しているのが実態でございます。あわせて、観光教育の方もおそらく予定されていた内容や授業そのものが相当ひっ迫しているということで、余儀なくされていたと思います。

先般の第1回の協議会でお伝えしましたように、日本観光振興協会も大幅な事業の組み直しをしました。観光教育に関しましては、いよいよ来年度、本日ご出席の寺本先生のご指導をいただきながら副読本を改訂します。IT化、ダイバーシティ、今般の感染症対策などを盛り込んだ形に作り替えようということです。副読本だけではなく、サポートツールとしての教本も必要ではないかということで、先生方に活用いただくための検討もしています。それを経て、数には限りがありますが、小中学校ですとか高校でのモデル授業をぜひ推進したいと思っています。それから副読本が出来ましたら、できるだけ各地域の観光団体、会社、学校での活用を全面的に推し進めることが重要です。また、観光産業の主だった企業が日本観光振興協会の支援企業として活動してくれていますので、企業を通じて観光教育推進のための意識合わせ、アクションに変えていき

いと思っております。

来年度以降も協議会は観光庁のおとりなしで進んでいくと思います。今日、いろいろアイデアは出ますものの、現時点で観光教育はどこまで到達しているのか、できているのかは確認できていません。その中で、何ができていないのかを見定めて、実践していくことを明確にできればと思っています。小学校あるいは高校普通科、専門学科では、いよいよプログラミングされるという話も出ました。やはり、現時点での到達点の認識が必要だと思います。特に小中学校では教えることが多すぎて、とても観光教育に時間が回せないという話も聞こえています。委員のご発言にもありましたように文科省との連携も必要かと思えます。

日本にとって基幹産業の観光産業は、非常に大事だということは定着しておりますので、それを教育的にどう広げていくのか、観光庁にリードしていただければと思います。

#### ○東洋大学・森下座長

ありがとうございました。コロナ禍で、地域も産業界も大変な中、日本観光振興協会さんには先んじて副読本を作っていただいている、改訂版も考えられているとのこと非常に心強く感じます。ありがとうございました。

以上で委員の先生方から意見をいただきました。本来ならば、ここで再度意見交換のやり取りをしたいところではありますが、時間の関係がございますのでご質問やご意見がございましたら事務局で用紙を用意していただいているようですので、そちらでお願いできたらと思います。

私も分科会には参加をしてこなかったのですが、今回、このような形でまとめていただきまして、分科会の取組が非常によくわかりました。

出てきたキーワードの中ですごく印象に残ったのは、観光で「何ができるのか」をもう一回、きちんとまとめないと、整理しないといけないという点です。最後に中村委員がおっしゃっていたように、何ができるのかだけではなく、何ができていないのかという整理も重要だと思います。何ができるかだけでは、やはり夢物語で終わってしまうということになりますので、きちんと整理していくことが必要です。先生方はすでに様々な取組を実践し、その中で見えてきたことがたくさんありますし、先行事例を分析していくことでさらに見えてくることがあると思います。その整理をすることで、観光教育がわかりやすいものになると思います。

今回、事務局でまとめていただいたものも、事務局に「よくわからない」と申し上げました。議論に参加された方はよくわかると思いますが、後から参加してこの資料だけ見ますと授業に遅れた子どものように何が分かって、何が分からないのかわからない、というところがありました。外に出していくためには少しわかりやすくすること、多分、よく読みますとすごく重要なことがまとめられているのですが、わかりやすくしていくことも重要かと思いました。

それと、先生方からの意見にもありまして、私も聞いていて耳が痛い、改めてはっと思ったことがありました。「観光」という言葉はすごく楽しげなもので、誰もがすぐに飛びつけるものですが、反面、みんなが楽しいと思いきり過ぎて、「観光」が頭に付くことで限定的な解釈をされてしまうことです。この「観光」という言葉の使い方も工夫しないと、かえって「楽しくて良いよね」で終わってしまうと、これは教育として足かせになってしまう部分もあるかと思いました。そのあたりも含めて来年度、整理をしていくと良いのではないかと思いました。

今回、多方面から、また実際に実践されている先生方、業務として実践されている方からご意

見をうかがいまして、分かりやすく、こういう風にやれば良いのだなと思った部分が非常に多かったかと思えます。皆様方のご意見、参考になったかと思えます。ありがとうございました。

私の方からは以上でございますので、ここまでで一旦、事務局にお戻しします。

○事務局・観光庁

森下座長及び委員の皆様、ご意見をいただきましてありがとうございます。ここで、町田参事官より一言申し上げます。

○観光庁 町田参事官

先生方、長時間にわたりまして大変貴重なご意見を改めていただきましたこと、本当にありがとうございました。

今回の議論を拝聴して、改めて課題の大きさと多さを認識しました。来年度、形になるものをどう作っていくのか、観光庁としてどうまとめるのかが非常に重要と認識しました。まだまだ消化しきれていない子どもという感じでもありますが、よく考えつつ、来年度、有意義な協議会にしていきたいと思いました。本当にありがとうございました。

○事務局・観光庁

本日の内容につきましては公開を予定しておりますため、議事概要を作成し追って皆様にご確認いただきます。その際は、よろしくお願ひします。

## 5 事務連絡等

### (1) 次年度以降の取組について

○事務局・観光庁

来年度に関しましては庁内で検討しているところです。今年度いただきましたご意見を具体的にどう形にするのか議論をしております。またご相談させていただくこともございますので、よろしくお願ひいたします。

### (2) ワークショップの開催について

○事務局・MURC 平川

資料2を説明。

○事務局・観光庁

本日の議事は、以上となります。ご質問や追加のご意見などがございましたら、適宜、意見募集のフォーマットをご利用いただき事務局までメールなどでご連絡ください。

これを持ちまして、第2回初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会を終了させていただきます。皆様、本日はお忙しいところ、ご出席いただきましてありがとうございました。

以上